第６節　様々な文化や伝統に親しむ

幼児は、四季折々の伝統的な行事に参加したり、唱歌やわらべうたの楽しさを味わったり、こま回しや凧揚げなどの伝統的な遊びをしたりすることを通して、様々な文化や伝統に親しみをもつようになっていく。また、地域の人々との関わりを通して自己肯定感を高め、安心感や役に立つ喜びを感じるようになっていく。さらに、異なる文化にも触れることで、より豊かな体験へとつながっていく。

ここでは、３年保育５歳児の具体的な実践事例として、先生や友達と一緒にわらべうた遊びをする姿（事例１「とんとんとん　なんのおと？」）、国旗に親しむ姿（事例２「いろんな旗があるんだね（オリンピックごっこ）」）、地域の人と関わる姿（事例３「Ａさんって、こま回し名人だね」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成３１年３月埼玉県教育委員会）Ｐ６８～Ｐ７１）

１　幼児の実態　（３年保育５歳児　計２４名）

進級当初から、４歳児の時に経験した鬼遊びや、わらべうた遊び、ルールのある遊びなどに、友達と誘い合いながら楽しむ姿が見られた。また、イメージを膨らませながらいろいろなごっこ遊びをする中で、なりきって遊ぶことを楽しんでいた。

運動会を経験し、友達と力を合わせたり競い合ったりすることで、より一層学級の友達との結び付きが強くなっていった。友達と考えを出し合い、共通の目的に向かって遊ぶ楽しさを感じられるように、教師は幼児同士の経験や思い、言葉をつなげていくようにした。

昨年度までは、正月遊びや餅つきの行事を通して地域の高齢者との関わりをもってきた。年長児になり、めんこや、割りばし鉄砲などの昔遊びを教えてもらうなど、年間５回の交流を通して、「〇〇さん」と、名前を覚えて呼びながら、親しみをもって関わる姿がある。

これらの経験の積み重ねにより、伝統的な文化を身近に感じながら、地域とのつながりの意識が芽生えるようにしたい。

２　ねらい

・わらべ歌を歌ったり、遊んだりして楽しみ、伝統に親しむ。（事例１）
・いろいろな国や国旗があることを知り、興味や関心を広げる。（事例２）
・昔遊びをする中で、地域の人に親しみをもって関わり、難しい遊びに挑戦する。（事例３）

３　指導を行う際に主に考慮する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

・家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに,地域の身近な人と触れ合う中で,人との様々な関わり方に気付き,相手の気持ちを考えて関わり,自分が役に立つ喜びを感じ,地域に親しみをもつようになる。また,幼稚園内外の様々な環境に関わる中で,遊び

や生活に必要な情報を取り入れ,情報に基づき判断したり,情報を伝え合ったり,活用したりするなど,情報を役立てながら活動するようになるとともに,公共の施設を大切に利用するなどして,社会とのつながりなどを意識するようになる。

〔幼稚園教育要領　第１章　第２の３(5)「社会生活との関わり」〕

・先生や友達と心を通わせる中で,絵本や物語などに親しみながら,豊かな言葉や表現を身に付け,経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり,相手の話を注意して聞いたりし,言葉による伝え合いを楽しむようになる。

〔幼稚園教育要領　第１章　第２の３(9)「言葉による伝え合い」〕

・心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で,様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き,感じたことや考えたことを自分で表現したり,友達同士で表現する過程を楽しんだりし,表現する喜びを味わい，意欲をもつようになる。

〔幼稚園教育要領　第１章　第２の３(10)「豊かな感性と表現」〕

４　内容

・教師や友達と一緒に、わらべうた遊びを楽しむ。（事例１）
・いろいろな国の国旗をつくり、遊びに取り入れる。（事例２）
・地域の人との関わりを楽しみながら、伝統的な遊びに親しむ。（事例３）

５　環境構成のポイント

・学級の友達と一緒に安全に走り回れる場の広さを確保し、わらべうた遊びに親しみがもてるよう、遊び方を分かりやすく伝える。（事例１）
・国旗の絵本や図鑑、オリンピックに関する情報や写真などを準備し、遊びのイメージが広がるようにする。（事例２）
・地域の高齢者との交流では、自然な関わりがもてるようにしていく。（事例３）

６　活動の展開と評価

⑴　事例１　とんとんとん　なんのおと？　（５月下旬）

わらべうた遊び、「からすかずのこ」「ずいずいずっころばし」「どんどんばしわたれ」などに興味をもち、誘い合って遊んでいる。園生活の中でも、友達と声をそろえる楽しさや動作を合わせるおもしろさを感じている。

そこで、学級で「あぶくたった」を行う。

Ａ児「知っているよ。僕、年中さんの時に年長さんとやったことがある。」
Ｂ児「僕も知っているよ。早くやろうよ。」
Ａ児「僕、鬼になりたい。」

Ａ児、Ｂ児は以前に遊んだ経験があったため、Ａ児が鬼になり、Ｂ児は教師と共に他の幼児に遊び方を教えることになる。

教師・幼児「あーぶくたったーにえたったー、にえたかどうだかたべてみよ♪」
Ａ児（鬼）の周りを歌いながら歩き、「むしゃむしゃむしゃ♪」と食べる真似をする。
Ａ児（鬼）「くすぐったいよ！」

体が触れ合うことを楽しんでいる。
　幼児達は「戸棚にしまってかぎをかけて、がしゃがしゃがしゃ。」「おててを洗ってごしごしごし。」「ご飯を食べてむしゃむしゃむしゃ。」「おふとん敷いてねましょ。」と、教師やＢ児の真似をしながら言葉に合わせた動作をする。
Ａ児（鬼）「とんとんとん。」
教師・幼児「なんのおと？」
Ａ児（鬼）「風のおと。」
教師・幼児「ああよかった。」
Ａ児（鬼）「とんとんとん。」
教師・幼児「なんのおと？」
Ａ児（鬼）「おばけのおと！」
幼児「キャー！」一斉に逃げる。
　繰り返し遊んでいるうちに、友達と声をそろえて言葉を言ったり動作をしたりすることを楽しむようになる。鬼になった幼児は、音の出る物を想像して言葉にし、他の幼児は「おばけのおと」という言葉がいつ出てくるのかと期待している。

○事例１に対する評価

（幼児理解）

　昨年、年長児と遊んだ経験があるＡ児とＢ児が遊びをリードし、わらべうた遊びの節回しや言葉の響き、リズムの心地よさを感じている。友達と手をつないで歌ったり、言葉に合わせて動作をしたりすることで一体感が生まれ、たくさんの友達と同じ遊びをする楽しさを感じていた。

　鬼になった幼児は、音の出るものは何かを考えて言葉で伝えようとし、他の幼児は、「おばけのおと」という言葉により鬼が追いかけてくる期待感や、程よい緊張感を楽しんでいる。

（環境構成・教師の指導・家庭との連携）

　わらべうた遊びの文化や奥深さを教師は熟知し、幼児の発達に合わせて遊びに取り入れていくことで、幼児はわらべうた遊びをより身近に感じるようになる。

　さらに、異年齢児と関わって遊ぶ機会を意図的につくることで、わらべうた遊びは自然に伝承されていく。保育参観などにおいて、親子でわらべうた遊びに親しむ機会をつくり、家庭でも楽しめるように計画する。

⑵　事例２　いろんな旗があるんだね　（オリンピックごっこ）　（10月中旬）

　運動会で飾った万国旗を見たり、親子で「聖火リレー」競技に参加したりすることで、いろいろな国の国旗やオリンピックに興味や関心が高まる。Ｃ児は、国旗の図鑑を熱心に見ている。
Ｄ児「この旗、見たことがある。オリンピックでみたよ。」と加わる。
教師「オランダってかいてあるね。」
Ｄ児「そうだ、サッカーの試合で見たことがある。」

「オランダの旗、つくりたいな。」
Ｅ児「ぼくは日本がいいな。」と、日本の旗をつくり始める。
Ｆ児、Ｇ児「いろんな旗があるんだね。」と興味を示す。
教師が絵の具と画用紙を用意すると、Ｇ児は図鑑を見ながらクレヨンと絵の具でブラジルの国旗を描き始める。
教師「難しい国旗に挑戦しているね。」Ｇ児の思いを認めていく。
Ｄ児「手に持つ旗にしたい。」と、広告紙を丸めた棒に貼り付ける。
安全面を考慮し、教師が事前に遊びを想定して準備した広告紙を使い、棒をつくる。
Ｄ児「みんなの応援をしてくる。」と旗を持って戸外に出掛ける。
他の幼児も刺激され、つくった旗に棒を貼り付けて戸外に持って行き、リレーごっこやサッカーをしている友達に、「がんばれー！」と旗を振って応援する。
翌日は、金メダルをつくることに遊びが発展する。
Ｆ児「階段にのぼるんだ。」と表彰台をイメージする。
教師「積み木でつくってみる？」と提案する。
Ｅ児「いいね！」と賛成し、表彰台づくりが始まる。
Ｇ児「ぼくもやりたい。」と、表彰台をつくり始める。
その後、「君が代」に合わせて日本の国旗が高く揚がっていくのを再現したいとイメージが広がっていく。

○事例２に対する評価

（環境構成・教師の指導・家庭地域との連携）

教師が意図的に国旗の絵本や図鑑、オリンピックの写真などを用意したことから、世界の国旗に関心をもち、国旗づくりからオリンピックごっこに発展していく。幼児の興味や関心の高まりに合わせ、タイミングよく材料や用具を提示し、教師も共同作業者となり幼児のイメージを実現するための援助をしていくことが大切である。

教師は幼児の予想される姿から適切な環境を構成しながらも、幼児の思いを受け止め、安全面に配慮しながら柔軟に対応していくことが必要である。

異なる国の文化に触れる機会として、地域・保護者ボランティアの協力による「英語で遊ぼう」を計画し、英語での簡単なあいさつや歌などを通して、様々な国の異なる文化について紹介していく。

⑶　事例３　Ａさんって、こま回し名人だね（１月上旬）

Ｈ児、Ｉ児、Ｊ児は、投げごまに興味をもち、３人で競争することを楽しんでいる。
Ｋ児「ぼくもこまを回せるようになりたい。」と紐を巻こうとする。
Ｋ児「難しくてできないよ。」紐を巻くことが難しい。
教師「難しいね。でもだんだん上手になってきたよ。」
教師はＫ児の気持ちを受け止め、励ましながら少しずつ上達していく楽しさが経

験できるように援助していく。
　数日後、地域の高齢者との交流活動で、こまを使って遊ぶ。
Ｋ児「何回やってもできない。」と、諦めかけている。
Ａさん「おじさんが一緒に紐を巻いてあげようか？水をつけると巻きやすくなるんだよ。」
　Ａさんはバケツに水を汲んでくると、紐をさっと濡らす。
Ｈ児「えーっ、濡らしちゃうの？」
Ｉ児「濡れちゃった。」と二人で顔を見合わせる。
　Ａさんは慣れた手つきで紐を巻くと、あっという間にこまを回して見せる。さらに回っているこまを紐ですくい上げ、今度は手のひらで回す。
「すごい。すごい。」「Ａさんって、こま回し名人だね。」と、Ａさんの周りに幼児たちが集まってくる。こまを、Ｋ児に持たせる。
Ａさん「力を抜いて、まっすぐ投げるよ。」「いち、にの、さん！」
Ａさんが、Ｋ児の手をもって一緒にこまを投げる。
Ａさん「ほら、回った！」
教師、Ｉ児、Ｊ児「Ｋ君すごい！やったね。」
Ｋ児は「やったー！」と、満面の笑みで喜ぶ。
Ｋ児「もう一回やってみたい。」
Ａさんに教えてもらいながら挑戦する。
Ｋ児「Ａさん、ありがとう。Ａさんみたいにできるように頑張るね。」
Ａさん「おじさんも応援しているからね。今日は楽しかったよ。ありがとう。」
Ｋ児「お家に持って帰ってやりたい。もっと上手になりたい。」
　　「お父さんやお母さんにもみせたいな。」
　Ｋ児は、降園時に迎えに来る保護者にこまを回して見せることや、家族みんなでこまを回して遊ぶことを楽しみにしている。

○事例３に対する評価

（幼児理解）

　幼児にとって地域の高齢者は、ありのままの自分を受け止めてくれる居心地のよい存在のようである。高齢者との関わりをきっかけに、日本の伝統的な遊びである「こま」に興味や関心をもつことができた。

　こまの回し方を教えてもらうことで遊びがより楽しくなることを経験し、遊びへの挑戦意欲に高まりが感じられる。さらに、「ありがとう」などの言葉をかけてもらうことで自分は大切にされているという自己肯定感につながっている。地域の高齢者との関わりを通して、安心感や人の役に立つ喜びや、人と関わる楽しさを感じていた。

（教師の指導・家庭との連携）

　日本の伝統的な遊びであるこま回しは、指先の器用さや集中力を養いながら、教え合ったり、競い合ったりすることで対話も生まれる。教師は、幼児が昔遊びに取り組む様子や伝統的な遊びの奥深さ、教育的価値を、降園時や保育参観などを通して保護者に伝え、家族やいろいろな世代の人と楽しみながら受け継がれていくよう

にしたい。

7　評価を踏まえた指導計画の改善

⑴　短期の指導計画の改善

幼児が様々な文化や伝統に自然に興味や関心をもつようになるためには、幼児理解を基盤に、意図的、計画的に親しみをもつきっかけをつくることが大切である。幼児の発達の様子や興味、関心、季節の行事などを十分に考慮し、その時期にしか体験できないことは、機会を逃さずに取り入れていきたい。

幼児が伝統的な行事に参加したり、異なる文化に触れたりする際には、地域の人と関わることが多い。幼児が自己肯定感を高め、安心感や人の役に立つ喜びを感じられるように、地域の人と事前に十分な共通理解をしておくことが大切である。その後の保育の展開にどのようにつながっていくのかを考慮し、見通しをもった指導計画の改善に努めていく必要がある。

⑵　長期の指導計画の改善

様々な文化や伝統に親しむことは、園での四季折々の行事に関連していることが多い。一人一人の幼児の経験や発達する姿を捉え、その行事が幼児にとってどのような意味をもつのかを考慮し、行事がもたらす教育的価値について十分に検討していかなければならない。

心を動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、幼児が様々な文化や伝統に親しむことで、幼稚園生活がさらに豊かで充実したものとなるように年、学期、月などにわたる長期の指導計画の改善を行っていきたい。